

E・クルガーノフ，N・オホーチン編

『18世紀末—19世紀初頭のロシアの文学的アネクドート』

モスクワ，「芸術文学」出版社

1990年，270 pp.

坂内徳明

1

噂話やジョーク，一口話や逸話の嫌いな民族は地球上に存在しないだろうが，ロシア人もアネクドートという言葉に象徴される，ごく日常的・立ち話的な言語作品が好きな民族であると繰返し言われてきた。特にソビエト時代には，路上，家庭内，ないしは内輪の集いなどの場で，ごく親しい者どうしの風刺話としてのアネクドートが語り伝えられ，厳しい社会体制下での気晴らしとして，また，庶民の「健全なる笑いとユーモア」の文化の例証にアネクドートが言及されることが多かった<sup>(1)</sup>。たしかにそうした指摘がロシア・ソ連でアネクドートがポピュラーであることのひとつの側面を説明していることは間違いない。このフォークロア作品には，鋭い現実観察と瞬間的な言語表現・コミュニケーションによって，根源的には文字化されえないか，されにくい世界（それなしにはロシア文化が成立しないと言っても過言でない）が鮮やかに表現され，社交性の回復による社会の確認がおこなわれていたからである<sup>(2)</sup>。しかし，その文字化されぬ世界を政治的ないし性的なタブーに満ちたものであるとか，アネクドート隆盛はそのタブーが検閲と全体主義体制ゆえに厳しく禁じられたためであると説明することでは不十分だろう。ソビエトという社会が極度に多くのタブーと神話を抱えたものであったにせよ，タブーのない社会は社会でないからである。

ところで，近年のロシアにおける「アネクドート集」出版の動きにはきわめてめざましいものがある。そのごく数例を，奥付けに記された発行部数とともにあげてみると，

『ソビエト・アネクドート』モスクワ，「ダダストローム」社，1992年，131ページ，5万部／『乾杯とアネクドート』モスクワ，「ソチイズダトセルビス」社，1992年，96ページ，5万部／『アネクドート1万』モスクワ，「ダダストローム」社，1991年，第1冊，90ページ，10万部／『アネクドートにみるソ連邦史，1917-92年』リガ，1992年，20万部／『サラートフで集められたアネクドート200』サラートフ，ブリヴォルガ社，1992年，71ページ，2万部

ここに名前のがあった「ダダストローム」社の出版計画によれば，テーマ別の全20巻からなる『アネクドート全集』や『アネクドート百科事典』の発行も予定されている。このほか，新聞・週刊誌の紙上，『サマゴーン』（密造酒の意味）『アネクドート』といったタイトルの専

門新聞を見れば、まさしくアネクドート・ブーム、アネクドート時代の到来の感がある<sup>(3)</sup>。むろん、そのことの理由を想像するのはさほど困難でない。多数のスクャンダルとタブーを保有してきたはずのソビエト・ロシア社会が（ただし、たんに政治的・イデオロギー的原因によるのではない）、公式にはスクャンダルは存在しないとしてきたがために、スクャンダル解禁としてこうした出版物へ読者が殺到したことが大きな契機のひとつであろう。

もっともその一方で、こうした文字化されたテキストの多くが、奇妙にも、以前に直接に耳にしたり、文字で読んだものと比較して迫力を欠くことも指摘しておくべきである。文字化によるアネクドートの魅力の半減と「自由」体制下での社会的・文化的緊張の喪失がそのことの大きな原因である。加えて、ここに収録されたものの多くが、かつて実際にソビエト社会の路上や親しい仲間の中で語り伝えられ、一部が欧米で活字化されたものからの機械的な再録や焼き直しだからである。例えば、この分野では、欧米でもっとも評判の高いD・シュトルマンとS・チクチン共編『政治的アネクドートの鏡に写ったソ連邦』（第2版改訂増補版、1987年）が、ロシアで刊行されるこの種のアンソロジーの出典としてたびたび利用されているのである。検閲の廃止、ガラスノスチの徹底化を素朴にそのまま受け止めるだけでは済まない問題がここにはひそんでいる。

## 2

ここで紹介する『18世紀末—19世紀初頭のロシアの文学的アネクドート』も、そうした「アネクドート現象」の中でとらえることができる。本書は、派手に映る政治風刺もの、スクャンダルものやエロ・グロもののアネクドート集に比べて、はるかに「教養主義的」なアンソロジーである。ここには、タイトルの示すとおり、18世紀末から19世紀初頭という時期のインテリたちの中で語られ、書きとめられた逸話が同時代のさまざまな文献から拾い集められている。逸話の全体数は670を越え、巻末にあがっている出典文献は140点にもおよぶ。全体の章区分は、「ピョートルからエリザベータまで」、「エカテリーナの栄えある世紀」、「パーヴェル1世の治世」、「アレクサンドル1世と彼の時代」、「ニコライの時代」という具合に皇帝の治世時代順で、さらに、その中は、道化バラキレフ、ゴリツィン、ナルィシュキン、ポチョムキン、メンシュコフなどの貴族、作家のスマローコフ、クルィロフ、プーシキンなどが人物別に配列されている。

近年の『アネクドート集』ブームの中に、歴史的人物のエピソード集大成が多く見られることからすれば本書の位置もある程度まで理解できるかもしれない<sup>(4)</sup>。それら集大成の多くは革命前の出版物のリプリントそのもの、その一部抜粋であったり、パンフレット版であったりするが、背景にうかがえるのは何よりも歴史的人物のエピソードにたいする関心の高さである。この分野は、これまで民俗学の枠内では「個人に関する伝説、言い伝え」として取り上げられてきたが、特に革命前の皇帝・権力者や貴族にたいする「評価の低さ」（ただし、それはあくまで公式的なものである）のために、スタテックな形でのみ取り扱われてきた。個人のエピソードへの関心は本来ロシア人にとってきわめて大きなものだったが、歴史的ア

ネクドートへの注目は、たとえ、そのことがロシア人の著名人好み、個人崇拜的志向に通じ、一方で良き過去への郷愁を誘うものとも言えるとしても、そうした個人評価の見直しと過去の検証は多くの成果をもたらすはずである。

こうしたことからすれば本書は、上述の配列と構成からも、現在盛んに刊行されているアネクドート集の多くと共通な部分を持つかに見えるが、にもかかわらず、それらとは決定的とも言える違いが本書にはある。このことは、編者のひとりであるクルガーノフによって書かれた「我らには口承文学があったし、今もある」と題された序文に詳しい。それによれば、18世紀半ばに西欧からロシアにもたらされた「文学的アネクドート」がジャンルとして最終的に確立したのは1820年代半ばから1830年代初めにかけてのA・プーシキン時代であったこと、そして、このジャンルはたんなる文学上のジャンルとしてだけでなく、価値ある「交流の文化」(社交と表現できる)として機能するようになったこと、「アネクドートを民族の記憶の中に保存しようとする傾向」が現れたことが指摘されている。そして、まさにその時代にアネクドートが軽薄で意味のないおしゃべりイコール文学になろうとしていた時、このジャンルを「救済するための根源的な試み」がプーシキンの「テーブル・トーク」とP・ヴァーゼムスキイの『昔日覚書』であったという。言い換えれば、当時、いまだ「文学」は制度として成立していなかったため、噂話やエピソード、逸話といったジャンルこそがその時代と社会の中心的なメッセージたりえた。後世の、制度化した文学の視点からすれば周縁のジャンルに見える書簡や回想記、テーブルトークやメモ書きとともにそうしたアネクドートは、18世紀末から19世紀初頭という時代において、まさしく中心的ジャンル化しえていないからこそ重要な表現メディアとなっていた。そしてまた、アネクドートは「文学におけるいわゆる商業的方向との蔽しく、苛酷な闘いの過程で発生した」というのである。

このような本書編纂の意図の基礎にあるのは、直接の言及こそないものの、今世紀初頭にフォルマリスタたちが同時代の文学の生成過程を追跡していく中で、18世紀後半から19世紀前半の文学の構造解明へと向かっていった試みであり<sup>(5)</sup>、同時に、大きな過渡期を経験しているロシアの現代文学にたいする危機感である。かつてYu・ロートマンは、18-19世紀初頭のロシア社会の「特殊な記号学的システムとしての日常行動」を描こうとした時、ピョートル、ポチョムキン、スヴォーロフといった偉人たちの「アネクドートの伝記」に着目した<sup>(6)</sup>。アネクドートを過渡期にあるロシア社会をとらえるためのテキストとしたのである。

ひそやかに語られたアネクドートの笑い語りで結ばれていた社会が消滅し、終焉しつつあるという事実を前にして、アネクドートは一方で商業化・陳腐化し、他方ではより魅力あるものへと淘汰されつつある。それはロシアの言語文化の大きな変容を意味するものとなるに違いない。グラント・デザインが存在しえず、社会のストーリーが成立しえていない現在のロシア社会にあって、アネクドートがこのロシア社会の文化的基礎構造と歴史をとらえるためのすぐれた方法たりうること<sup>(7)</sup>を本書ははっきりと教えてくれる。

## 注

1. 日本語によるアンソロジーとしては、原卓也編著『ロシア・ジョーク集』1978年、実業之日本社、平井吉夫編『スターリン・ジョーク』1983年、河出書房新社、ジャンナ・ドルゴボーロワ『ロシアより笑いをこめて』深見弾訳、1986年、光文社、など。
2. 沼野充義「一口話の精神」『スラヴの真空』（1993年、自由国民社）、木下康光「文芸の人類学——アネクドートについての覚え書」『同志社外国文学研究第58号』1990年。
3. 例えば、『オゴニョーク』紙1991年1号のナタリヤ・ソコロヴァによる集成、同紙1991年19号の「チトフのアネクドート」、『ネヴァ』誌に連載のV・バフチンの採集による「第7ノート」など。
4. そうした偉人の逸話集の出版例をあげると、『P・ルミャンツェフ、A・スヴォーロフ将軍に関するアネクドート』モスクワ、国際ビジネスセンター、1990年、『エカテリーナ2世とグリゴリ・ポチョムキン、歴史的アネクドート』モスクワ、国際ビジネスセンター、1990年、M・シェヴリャコフ『アネクドートにおけるプーシキン』オリョール、1992年、など。
5. Yu・ティンチャーノフ「ドストエフスキイとゴゴリ」（1919年）、同「文学的事実」（1924年）、T・グリツ他『文学と商業』モスクワ、1929年。
6. Yu・ロートマン「18世紀ロシア文化の日常行為のポエチカ」（1977年）『3巻選集』第1巻、タリン、1992年。
7. 「すぐれた方法」と記したことは、一種の希望的観測であるかもしれない。しかし、かつてA・シニャーフスキイが「反ソビエト」というきわめて極限的な状況においてではあるが、「確立した」ジャンルたりえぬ言葉作品としてアフォリズムという手法に拠って『思わぬ閃き』（1965年）を著わしたことを想起するならば、現代のアネクドートがいかに新たな生命を生み、保つのかを見ていくことはきわめて重要なテーマである。さらに、同じく彼のアネクドートにたいする達見は、『ソビエト文明』（1988年、ただし、1990年刊行になる英訳の224-225ページ）に読むことができる。

Русский литературный анекдот конца XVIII-  
начала XIX века/Вступ. ст. Е. Курганова ; Сост. и  
примеч. Е. Курганова и Н. Охотина.  
М. : Худож. лит., 1990. 270 с.